

2020年度第2回 埼玉森林インストラクター会現地研修会

日 時：2020年12月12日（土）

場 所：小倉城跡・道元平（ときがわ町）、嵐山渓谷（嵐山町）

参加者：青柳、池田、桂、河野、黒川、小泉、鴻森、土金、西田、服部、星野、本田、黛、三橋、森永、横山、吉野、渡辺 計18名

担当講師：桂幸一、本田和彦 報告：森永直也

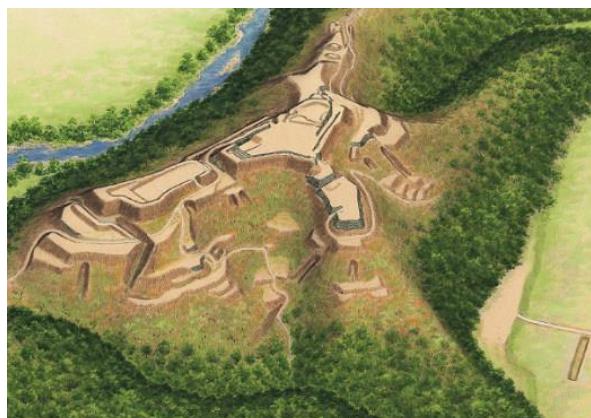
新型コロナで明け暮れた2020年の年末を飾る現地研修会は、インストラクターの森でお馴染みのときがわ周辺を訪ねる「小倉城址・道元平・嵐山渓谷散策」です。参加者18名の盛況ぶりとともに、地勢的な平野と山域の転換点を舞台に、自然と歴史さらには師走なのに紅葉まで加わった研修は、とても興味深い内容となりました。



最初の目的地である「小倉城址」は戦国時代の山城で、解説の城の位置取りを抜粋すると

『槻川—都幾川—古荒川水系を基幹に陸路は鎌倉街道上道と山辺の道（八王子城—鉢形城を結び上州へ抜けるルート）の中間で双方へアクセス可能な位置にあり中世の水陸交通を強く意識したもの』とされています。特に著名ではない山城ながら、水系と陸路を考慮した立地という着眼点に先人の巧みな知恵を感じます。

また、『この史跡の最大の特徴が、全国的に珍しい石積み遺構です。平成の調査で、最大高約5m、総延長120mあまりの大規模な石積普請が発見されました』とのこと。石積普請は戦闘に備えたものだった



小倉城イメージ鳥瞰図

のか、別の意図が何かあったのか…丘陵より低地を見下ろす山城の跡にて、戦国武将への妄想が膨らむばかり。

小倉城址より丘陵内を小一時間程移動して、次の目的地である「道元平（どうげんびら）」へ。「道元平」は良好な自然環境を保全する「埼玉県自然環境保全地域」に指定されており、当地の指定理由が、『暖帯及び温帯に生育する植物が共存して、植物分布上特徴のある地域

となっているとともに、これら暖帯性の植物の生育地としては、ほぼ北限に近いものであること』となっています。

現地は指定されている位置が公表されていないため、厳密な場所の特定は難しかったの



暖帯性のシダ類 ウラジロ

ですが、本日のガイド役である本田さんが入念な事前踏査で案内して下さり、指定理由に沿った暖帯性でほぼ北限に近いウラジロや、温帯性のアブラツツジ（確実な同定は開花期待）の自生を見ることができました。また、移動中は落葉が進むこの時期でも、常緑性の低木であるヤブコウジやミヤマシキミの彩りの良い結実なども楽しめました。

最後の目的地、「嵐山渓谷」はその地形的な特徴から、かつては長瀬の岩畳に例えて“新長瀬”と呼ばれていたこともあるとか。そして昭和の初め頃、日本で初めての林学博士・本多静六博士が当地を訪れ、渓谷と周辺の紅葉や赤松林の美しい景観を眺め、京都の嵐山の風景によく似ているとのことで、“武藏国の嵐山（むさしのくにのあらしやま）”と命名。これが大変評判になり、渓谷周辺には料理旅館の「松月楼」がオープンするなど、埼玉を代表する景勝地となりました。東武東上線の菅谷駅も「武藏嵐山駅」に改名され、駅から観光客の長い列ができたとされています。

その「松月楼」跡地に現在造られている公園にて本日の昼食と記念撮影。嵐山渓谷沿いの樹林地は「さいたま緑のトラスト保全第3号地」として管理されており、渓谷とともに雑木林の面影を残すトラストの樹林地も散策できました。

12月の山域は一般には落葉した冬枯れのイメージですが、暖帯性植物の生育する気候をもつ当地一帯では、紅葉しているモミジ類などを眺めることができ、往時には文人達にも愛されたという嵐山渓谷の雰囲気に触れられた研修となりました。



引用・参考資料：埼玉県・ときがわ町・嵐山町観光協会の各ホームページ